東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

現地教材をいかした教科学習を通して：小学部4年生社会科と3年生社会科の事例(教科指導)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-10-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 生田, 博孝 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174408

現地教材をいかした教科学習を通して

── 小学部４年生社会科と３年生社会科の事例 ──

前ドバイ日本人学校　教諭
大分県臼杵市立市浜小学校　教諭　生　田　博　孝

キーワード：教材開発，住みよいくらし，はたらく人

１．はじめに

ドバイ首長国は，アラブ首長国連邦のほぼ中央に位置し，日本からは約8000km離れており，面積は埼玉県と同じくらいである。日本人学校は，ドバイの中心部に近く，児童生徒の通学にも便利の良いところにある。周囲にはインター校や現地校などがいくつかあり，静かな恵まれた環境である。

この数年間の目覚ましいドバイ経済の発展に伴い，児童生徒数は，急激に増加した。しかし，世界的な経済情勢の悪化により，今は徐々に減少傾向にある。ドバイ日本人学校も他の在外教育施設と同様に，教科学習では日本の教科書を使用しているが，地域に根ざした教材を扱うことの多い社会科では，「私たちのアラブ首長国連邦」という副読本を派遣教員全員で協力して作成し活用している。その編集作業は，以前からの資料を引き継いで作成する部分もあるが，日本とは大きく異なる環境の中で現地教材を見つけ，教材化していくと言うことは，大変な作業である。しかし，様々な体験を通して教材開発をすることは，苦労以上に楽しいものである。

また，子どもたちが意欲的に，かつ主体的，自主的に学ぶためには，体験活動を通して自分の課題を持ち，それを解決することが重要である。その過程において，子ども同士が知恵を出し合い，相互に深め合っていく学習は，教え込みの指導ではできない。個人差に対応し，どのレベルの子どもも伸ばしていく指導を行うためにも現地教材を用いて体験的に学習することが必要であると考える。

本稿では，４年生社会科「水はどこから」と３年生社会科「工場のしごと」の２つの単元についての教材開発について紹介したい。

「水はどこから」の単元では「海水から水をつくるしくみ」を扱っている。雨がとても少なく，川もないドバイだが，わたしたちが生活の中で水不足で苦労することは全くない。そんな大量な水は，いったいどこからくるのかについて学習する。また，「工場のしごと」の単元では，わたしたちの暮らすドバイにも，生産に関する仕事をしている人々がわずかだがいることを知り，その人々によって私たちの生活が支えられていることを学習する。

いずれの活動も，現地採用の学校事務員と派遣教師との連携により行われている。

２．具体的な実践事例

(1) ４年生社会科「水はどこから」の教材開発例

①単元の目標

普段何気なく利用している水がどのようにしてつくられているのか，理解できなかった児童が，飲料水を確保するための施設・設備の様子を調査したり，見学することによって，雨が降らず水が不足しがちなドバイにあって，いかにして水を確保する対策がとられているのか理解することができる。また，水をつくり出す事業が組織的かつ計画的に進められており，地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解することができる。

②活動内容

【水道から出てくる水はどこから】

教科書を使い，川の水をきれいにして飲料水としている日本のことを学んだ後，「ドバイの水はどこから来るのかな？」ということで考える時間を持った。ほとんどの子どもたちは，今まで何も考えずに水を使っていたので，分からないということだった。中には，砂漠にも地下水があり，それを運んできているのではないかという意見や，海水から作っているという話を聞いたことがあるなどの意見もあったが，詳しく知っているという子はいなかった。

【海水から真水に】

ドバイでは，日本とちがって飲み水はミネラルウォーターが中心である。「マサフィ」「アル・アイン」といった名で日本でもおなじみの水は，地下水を井戸でくみ上げてペットボトルなどにつめたものである。それをスーパーマーケットなどで購入して使用している。

しかし，各家庭でお風呂や洗濯，料理などに使う生活用水や工場で使う「オアシス」という水は，海水を淡水にして，さらに加工してつくられた真水である。

海水から水が作られているのは，ドバイの端の方に位置するジュベル・アリという海の近くの地域にある「DEWA」という施設である。この施設では，単に海水から真水を作っているだけにとどまらず，その工程でアルミニウムも作り出している。

水は１日に約90万トンが作られているそうである。できた水は，大きなタンクにためられて，さらにきれいにされ，地下のパイプを通り，家庭や工場などに運ばれる。その途中で水のタンクに一度ためられるのは，水圧を高めて水の出を良くするためで，そのタンクが地上に出ているため，夏場に水道の蛇口をひねると驚くほど熱いお湯が出てくるのである。これは，ドバイでしか体験できないことの一つかもしれない。

【砂漠の国に緑がいっぱい】

ドバイに来て驚くこととして，砂漠の町であるのに緑がとても多いことがある。これは，スプリンクラーやパイプなどで植物に水をやるしくみが発達しているからである。この水の量は，たいへん多いので，せっかく作った水道水を使っていては足りなくなってしまう。そこで，一度使ったよごれた水（下水）を下水処理場できれいにして使っているのである。

限りある水資源を有効に使い，環境整備をすすめ，主力産業である観光業に役立てている点もドバイのすばらしさである。

【不思議な光景】

近代化の進むドバイの家にも，昔ながらの伝統が垣間見える不思議な光景がある。地元のアラブ人が住んでいる家の外塀には，おもむろにステンレスの蛇口が外に向かって装備されている。古くからある長屋風の家，新築の一戸建てを問わずよく見かけるこの蛇口は，完全に外向きに，そして道路に面して作られている。蛇口をひねると「水」がふんだんに，しかも冷たく冷やされて出てくる。もちろん飲み水にも利用可能である。では一体何のために設置してあるのか？

答えはイスラムの教えにあり，イスラム教でもっとも大切な五行のひとつ，「喜捨」の精神にのっとったのが，この蛇口である。「持てる者は持たざる者にそれを分け与えるべし」というわけで，貴重な飲み水が惜しげもなく不特定多数の人々に提供されているのだ。お祈りに向かう人たちが身を清めるために，そして屋外を行き交う人々の渇きを癒すために備え付けられたものなのである。何でもこの蛇口には，亡くなった家族の供養の意味も含まれているそうである。この水を使って体を清めた人が，お祈りの際に自分たちの家族の供養もしてくれると言う仕組みなのだそうだ。もちろん水道代は家主の負担である。だが，誰でも自由に利用できるし，とがめられることはない。

子どもたちも私も不思議に思っていたことについて調べ，理解することで，ドバイに住む人たちの水に対する思いをさらに深く理解することができた。

③まとめと課題

淡水化プラントについて説明をしてくださった担当の方は，難しい内容を子どもたちにわかりやすく，また身振り手振りを交えながら説明してくれた。子どもたちも，それを理解しようと，いつも以上に集中して聞くことができた。海水を取り入れる施設を見学し，海水が瞬時にかつ大量に取り入れられているのを見て，子どもたちは驚きの声を上げていた。

普段何気なく飲んでいる水が様々な工程を経てつくられ，そのつくられ方を学んだ子どもたちは，ドバイの水のありがたさに気づくことができた学習であった。

(2) 3 年生社会科「工場のしごと」の教材開発例

①単元の目標

身近な地域の生産活動の実際について，観察・調査したり，表現したりすることを通して，仕事の特色や他地域との関わり，仕事に携わる人々の苦労や工夫を具体的に考えることができる。

②活動内容

【ドバイにも工場があるの？】

ドバイでは，生産活動をしている工場というものが，それほど多くはない。また，日本人学校の保護者の中にもそういった仕事に関わっている方が少ないと言うことで，ドバイには日本のような工場はないと考えている子がほとんどであった。

そこで，ドバイにもみんなの暮らしを支えてくれている人たちがいることを紹介した。「ドバイの人が本当にそんなこと，できるの？」少し残念だが，これが子どもたちのドバイに対する印象であった。

【機械化された工場にびっくり】

今回は，子どもたちに身近な物としてポテトチップスの工場とジュースの工場へ見学に行った。児童用の資料などの入手がむずかしいため，見学の際にはできるだけ多く質問をし，詳しくメモを取ることを促した。

ポテトチップスの工場で説明してくださった方は，フィリピンから働きに来ているということで，食品ということから衛生面での工夫について詳しく説明をしてくれた。残念ながら工場内は企業秘密の漏洩を避けるためだろう，撮影は許可されなかった。

私もだが，その機械化された工場内の様子にとても驚かされた。できあがったお菓子を箱に詰めて倉庫に運ぶところで，パキスタンから来ているという数名の人たちを見かけたくらいだった。

ジュース工場でも，温度管理や生産工程のほとんどが機械化されており，働いている人が少ないという点では同様であった。工場で働く人たちは，きちんと制服に身を包み，マスクをし，頭にもしっかりと帽子をかぶって作業をしていた。

シリア人の検査責任者は，できたジュースは，必ず厳しいチェックをしているので，この工場でつくられるジュースには，絶対にバイ菌は入らないのだと自信満々に説明をしてくれた。

ジュースの原料である砂糖は，ドバイにある砂糖工場から，味を決めるジュースフレーバーは，本社のあるドイツから輸入されるということだ。1 日に 2 万 4 千パックを生産し，ドバイでつくられたジュースは，湾岸諸国は勿論，スリランカやモロッコ，アルジェリアといった遠い国などへも輸出されているという話に，子どもたちもだが，私もびっくりした。

③まとめと課題

3 年生の児童たちが，英語で説明される内容を聞き取ろうと集中している様子が伝わってきた。通訳をしてくれる人はいるのだが，それを聞く前にメモをとる姿から，英会話の授業で身につけた聞き取りの力が発揮されていると感じた。

また，簡単な質問については，英語を使って言おうとする子もいた。社会科の授業とはいえ，英会話の意欲的な

面からも，意義深い見学であると感じた。

３．現地教材を通して，子どもたちに理解してもらいたいこと

ドバイ日本人学校で子どもたちと接していく中で，遠く日本を離れドバイで暮らす子どもたちには，次のようなことを理解してほしいと強く思うようになった。

ドバイの現在の人口は約120万。そのうち現地の人は15万人ほどである。残りの100万人以上が外国人ということになる。この国の発展には，外国人の力なしでは考えられないと言うことである。今のドバイは，確かに世界的な不況により，途中で止まってしまったプロジェクトもある。それに伴う失業者もたくさん出ている。しかし，「崩壊」と言われるほどの状況ではない。考えられないような急速な発展が，少しだけスローダウンしているだけなのだ。

ドバイというと私も含めて多くの日本人が，石油を売って余ったお金で，ものすごいビルを建てたりしていると思っている。しかし，実際のドバイは，長期的な展望に立って様々な計画が進められている。

その代表的なものとして，フリーゾーンという経済特区のエリアがあり，世界中から約6500の企業が来ている。もちろん日本の企業もたくさん来ている。その関係者の方から話を聞いたのだが，ドバイは「流通のハブ」を目指しているということだ。

世界地図を広げてみればわかるが，ドバイはアラビア半島の北東の端にあり，ヨーロッパと中東，アジア，アフリカをつなぐ，世界最大の経済圏の中心に位置している。そして，流通手段としての船舶の活性化と言うことで，世界最大の港が作られていて，24時間稼動している。さらに，ドバイに集まる世界の企業に対して，法人税ゼロ，所得税ゼロという政策を実施している。この国は，着実に流通のハブを目指して各国との結びつきを深め，確実に進んでいるのである。

小学生の子どもたちにとって，ドバイという国の国際的な役割を理解するのは難しいかもしれない。しかし，現地教材を学習することを通して，ドバイという国がたくさんの国とつながりを持ちながら発展していると言うことを分かってほしい。そして，世界中からこのドバイに集まる人々が協力し合いながらその発展を支えていることを感じてほしいと思う。もちろん日本も同じように世界の国と大きく関わりを持ちながら発展し，助け合うことで人類はさらに発展していくことに気づいてほしいと願っている。

４．おわりに

これらの多くの活動は，派遣教師の力だけでは成立させることは不可能で，長年本校に勤務している現地採用の事務員や地域の人々の協力が不可欠である。派遣教師と現地の方々との連携が大変重要であるということにつきる。